

中央大学法科大学院

平成20年

新司法試験

合格者祝賀会

196人が

難関突破、

喜びの輪広がる

中央大学法科大学院の平成20年「新司法試験合格者祝賀会」が11月5日 ホテル・グランドヒル市ヶ谷で盛大に開かれた。196人の合格者のうち、この日は165人が出席。最高齢は59歳で、なかには学部課程中退後、法科大学院を修了して難関を突破した人も。さまざまな顔を囲んで、来賓の法曹界の先輩たちや恩師らを交えた祝意の輪が広がった。



学生記者 新部真子 = 文学部3年
梶原麗奈 = 法学部2年
田中祐美 = 法学部2年

▲合格者を囲んで和やかに歓談

◆前途洋々たる門出に祝意

午後6時30分、開会。拍手に迎えられて合格者が入場。165人の表情は、みんな晴れやかで、自信に充ち溢れていた。

はじめに永井和之総長・学長が合格者を前に、「合格おめでとうございませう」と挨拶。「中央大学の伝統を維持し、発展する基礎を与えて下さった教職者、関係者の皆様にお礼を申し、また、これまで、合格者を支えて下さったご家庭の方に心からお祝いを述べるとともに、前途洋々たる門出に改めてお祝いを申し上げます」と述べ、祝意を表した。

続いて、久野修慈理事長が、会場奥まで届くのではないかとばかりの大きな声で、「合格者の皆様が、社会に素晴らしい貢献をされることを期待するとともに、司法の社会を明るくして下さることを期待します」と述べ、合格者に熱くエールを送った。

来賓祝辞には、中大法曹OBのお二人が立った。最高裁判所の甲斐中辰夫判事は、法律家として「スキルとマインド」の重要性について強調。



お祝いの挨拶をする永井総長・学長

相手を説得する際には、その人の人柄が影響することを指摘して、「法律家として、一人の人間として、立派になるよう、今の気持ちを忘れないで、人から信頼される人物になって下さい」と激励した。

◆吉田久・大審院判事が言った「正義とは」

次に才口千晴・前最高裁判所判事が登壇。「どうも近ごろ、立法、行政ともうまく機能していない気がする。司法だけは、しっかりとさせたい」と述べた上で、民法の権威で母校・中央大学で教鞭をとった吉田久・大審院判事の業績を探索した新書『気骨の判決 東條英機と闘った裁判

官』（新潮新書）を手にして、吉田判事が「正義」について、「正義とは、倒れているおばあさんがいれば、背負って病院に連れて行ってあげるようなことだ」と言ったことを紹介し、未来の司法を担う合格者を激励した。



久野理事長

続いて、奈良道博・中央大学法曹会幹事長が、「40年前は、いま合格者が立っているそちら側の場所に自分はいた」と述べたうえで、「皆さんの今の嬉しさは手に取るように分かる」と祝意を表し、「努力を怠れば墮落していく。是非とも努力を続けていただきたい」とエールを送った。

乾杯では、中央大学顧問（元理事長）の阿部三郎弁護士が「無事、司法修習を修められることを心から念じる」と述べて、乾杯の音頭をとり、歓談に移った。

◆59歳で合格。夢はきつと叶う
年齢、出身校の違いを超えて中大

ロースクールで学んだ合格者には、さまざまな顔がある。そのなかで、最高齢の59歳で合格したのは、久保廣光さん（東京大学卒）。



久保廣光さん

団塊の世代に属する久保さんの大審院判事は学園紛争に激しく揺れ動いていた時代で、「学業に専念できたのは、2年間だけでした」と当時を振り返る。大学卒業後は、不動産会社に就職し、アメリカにも数年間勤務するなどサラリーマン人生を歩んできた。

50歳になった時だった。「自分の人生を振り返って、後悔することはないか、と考え、大学時代あまり勉

強に専念できなかつた。もう一度勉強をしよう」と決心し、司法試験の勉強を始めた。まさに一念発起である。

仕事をしながらの勉強は、限られた時間に集中して行つた。「合格できたのは、7年間も支えてくれた家

族、何より家内の支えがあつたからです」と感謝する。合格した時、娘さんからは、「よく頑張つたね」と祝福されたという。

「夢はきつと叶う。そのためには、人の何倍も努力する必要がある」。法曹を目指す後輩たちへのメッセージには、久保さんならではの実感と説得力がこもつていた。



才口・前最高裁判事(中央)を囲んで

田畑千絵さん(上智大学卒)も企業に勤めた経験がある。証券会社に6年間、勤務した。その間、弁護士の仕事をみる機会が多く、その仕事ぶりをみて弁護士を目指すことを決断、2003年10月から司法試験の勉強を始めた。

当初は、「検事と裁判官と、他に何があるの? という位しか知識がなかった」という。そんな人でも合格できるんですよ」と笑つた。「もしロースクールに入りたのなら、他の勉強もいろ



田畑千絵さん

いる頑張つたほうが良い。違う世界、いろんな世界を知つてほしい」と後輩へアドバイスしてくれた。

◆日本銀行で法律知識をいかす

ここにも、ちよつと違つた「顔」がいた。司法試験に合格して、日本銀行に勤めるといふ佐藤悠さん(慶応義塾大学大学院卒)だ。

何故そのような道を選んだのか、と伺うと、「ロースクール出身者として、法律知識をいかして、法曹以外の道で、社会の役に立つていきたい」と明快な答えが返つてきた。

慶応大学大学院在学中から、旧司



佐藤悠さん

法試験の勉強もしていた。中央大学ロースクールでは、「教授の方々がとても熱心で、改善点があればすぐに対応してくれる。そのような環境の中で勉強に集中することができた」と恩師らに感謝する。

他方、企業に勤めるサラリーマンではなく、専門職に就きたいという気持ちから法曹界を志したのは川崎慎介さん(早稲田大学卒)。

勉強方法について問うと、「本を読むのに手を抜いたら駄目。本に書いてある以上のことを調べることで」との答え。そのためには、「知りたいという気持ちが大切です」と



川崎慎介さん

強調した。

そんな川崎さんの息抜きは、「好きな知的財産の勉強をすること」だったという。息抜きも勉強とは。知ることに対してあくまで貪欲なのだろう。「何度か司法試験を受験し、努力してもかなわない経験をしているため挫折が強くなった」という。そんな時、支えとなったのが、ロースクールでの仲間たちだった。「中央大学はとても恵まれた環境だった」と笑顔で語ってくれた。

◆3年生で中大を中退し、決断

「社会的弱者、女性や労働者など

法律を知らないで困っている人を身近に感じ、弁護士を目指した」というのは、岸 愛さん（中央大学中退）。高校2年の頃からの夢が叶ったという。岸さんは、大学3年で学部を中退し、法科大学院に飛び入学した。



岸 愛さん

「中退することに、もちろん抵抗はありました。とても不安だったけれど、ロースクールの先生方に励まされ、決断をしました。決めてからは潔く、きっぱりと決めた道に進みました」

勉強は、課題や予習をこつこつとこなした。「性格上、積み残しだけはしたくなかったので心がけて勉強

した」という。

「みんなで勉強するのが楽しかったです。いい刺激にもなり、やる気になりました」と一緒に学んだロースクールの仲間に感謝した。

学部在学中には勉強だけでなく、オールラウンドサークルにも所属し、「楽しく過ごした」と爽やかに取材に応じてくれたのは、島崎詠一さん（中央大学卒）。優しい笑顔が印象的だ。



島崎詠一さん

とはいえ、1日に8時間自習したというから勉強漬けであったに違いない。学部2年生の時に法曹への道を目指し始めた。「頭が良くななくても、

一直線に頑張ればなんとかなる」と、どこまでも謙虚だ。「現場で働きたい。市民の近くに居られるから」と弁護士を目指す。

名前が、北京オリンピックのフェンシング銀メダリストの太田雄貴さんと同じことから、「太田さんの名前がテレビに出るたびにドキドキする」と笑わせてくれたのは、鈴木雄貴さん（慶応義塾大学卒）。



鈴木雄貴さん

理工学部の出身で、「いろいろな学部から、もっと法律家を目指す人が増えてほしい」と話す。そして、「ロースクールに入るまで、全く勉強していなかった」というのは、

ちよつとした驚きだ。勉強は「ひたすら授業の予習、復習とゼミが中心」であったという。弁護士志望で、「技術者、法律家の距離を縮めたい。その間に入って仕事がしたい」という。

◆父親の背中をみて法曹を志す

「司法試験の勉強をしていたお父さんの背中を追って、勉強をはじめた」というのは、生 和泉さん（立教大学卒）。立教大学法学部を卒業され、4年程、法律事務所でアルバイトをした後、中央大学ロースクールに進学した。

取材中に、中央大学法科大学院で、



生 和泉さん

英米法を教えているダニエル・ローゼン先生が歩み寄られ、「生さんは、とても優秀な生徒でした」と教え子の合格を心より祝っていた。

そんな生さんは裁判官を目指している。裁判官を目指す理由は、「弁護士と違って裁判官は被告、原告、両者の話しを聞いて判断することができるからです」と明確だ。

「法律を知らないが故に不条理な扱いを受ける人のサポートをしたい」というのは、加藤弾さん（中央大学卒）。学部在学中は、郁法会に所属して勉強に励んだ。「これほどやりがいがある仕事はないですよ。



加藤弾さん

正直者が馬鹿をみない社会にしていきたい」と胸を膨らます。

勉強に行き詰まったときは、「今辛いのは、将来救える人たちのためなんだ。自分のためじゃなくて、人のためなんだ」と思ってから切ったという。「自習の時間で得たものを友人や先生と話すことで正しいかどうかを見極めて、自分の考えを確立していきました」という。

◆「一層努力をしていきたい」と謝辞

懇談の後、岸愛さんが合格者を代表して謝辞に立った。岸さんは、「法学部・法科大学院を通して6年間、勉強だけに専念できる素晴らしい



合格者を代表して
お礼の挨拶をする岸さん

環境を与えて下さった中央大学の教員・職員の方々、法職講座で指導してくださったOB・OGの先輩、切磋琢磨しながら取り組んだゼミの素晴らしい仲間たちがあってこ

そ、私を合格に導いてくれました」と関係者らに謝意を表した。

今後は、「後輩の力になつていきたい」とし、自らに対しては「やっと一つのハードルを越えたばかり、今後はより一層努力をしていきたい」とさらなる努力を宣言した。

最後に福原紀彦・中央大学法科大学院法務研究科長が、「196名の合格を心よりお祝いするとともに、これまでご指導・ご支援を戴いた教員・職員・関係者の皆さま、そして、合格者を支えてこられたご家族の皆様に、厚くお礼を申し上げます。合格者の皆さんの一層の発展を祈ります。」と閉会の挨拶をして、祝賀会を締めくくった。